

セラピューティックレクリエーション

～その理解と普及の視点～

鈴木 秀雄*

Therapeutic Recreation

～The Point of View for its Understanding and Diffusing～

Hideo SUZUKI, Ph.D., CTRS**

Abstract

The purpose of this study is to deal with the point of view for understanding and diffusing Therapeutic Recreation in Japan. In terms of perceptibly comprehending "Therapeutic Recreation", the recreation concept itself to begin with should be discussed clearly and broadly. Without getting a great consensus of opinion and clear concept of recreation, it is very difficult for Japanese people to understand Therapeutic Recreation. Here in Japan, the concept of recreation has been narrowly depicted and been restrictedly grasped in the society, in turn, people are compelled to receive a narrow scope to recreation.

This paper points out how to understand recreation and how to be conceived it, and then the paper mainly referred to is the discussion about the apprehension of Therapeutic Recreation concept as well as the point of view regarding its necessity and value in order to be able to understand and diffuse Therapeutic Recreation.

* 関東学院大学 (Kanto Gakuin University)

** CTRS=Certified Therapeutic Recreation Specialist

受理 : 1994年 2月26日

I はじめに

物理的時間の経過感覚は、実社会の心理的時間経過の加速度的な変化により、より凝縮された形態でさらに短くなったという感覚で受容されている。換言すれば、時間経過は社会構造や生活形態の変化により益々短くなったと感じざるを得ない状況である。余暇社会の到来と共に、余暇時間の総量は増加してきているものの、時間的経過の速さと共に、その過ごし方や、活用の方法が問われている時代である。余暇活動の中で意識的・計画的にそして時として自然発生的・無目的的に生起するレクリエーション行動はさらに多様化・多方面化する中で、その本来の意味、機能、形態を十分に理解したうえで、一方では個人や社会の諸問題を浄化しようという発散解放機能や、他方では生活の質的向上という啓発創造機能の考え方に根ざした、それぞれの人間生活の潤滑油・栄養源として使用・利用・活用されることが望まれる。

現代社会にあって、社会的にも、精神的にも、身体的にも、完全なる形態で健康を保持増進し豊かな生活を享受するためには、それなりの方法や、かなりの努力を余儀なくされている。人間の段階的欲求ともいえる基礎的欲求を十分に満たし、結果として自己啓発や自己実現をするためには、無意識的な、あるいは自然発生的なレクリエーション行動のみでは実現しない。まして、日常生活の活動時間の延長からくる睡眠不足や、現代社会の文明・文化的生活からくる身体活動の不足、食生活形態・内容の変化、複雑な社会生活とそこから派生する多様な人間関係等で、多くの人々が半健康・不健康感を持たざるを得ない状況にある社会において、レクリエーションを“意識的に目的化して活用する”ことも重要である。

個人が機能的・能力的・社会的に、その軽重を問わず、いかなる障害を有するか否かの二極的視点でセラピューティックレクリエーションの存在を論ずるのではなく、寧ろ、あらゆる人にとって、自身のレクリエーション行動を生活の中にうまく取り込み、生活に潤いを与え、豊かにするための重要な要素であるという理解を、個人が持つべきレクリエーションそのものの価値観の中に包含できる概念形成をしていくべきである。

以下本論は、レクリエーションを意識的に目的化した領域強調概念としてのセラピューティックレクリエー

ションの理解と普及の視点について論ずる。

II レクリエーションの理解

レクリエーションという言葉は、今日多くの場面で用いられているが、それら多くの場面において使用されているレクリエーションを間違いなく、一言で定義することについては少々の混乱を呈する。単に外来語(英語)ということではなく、ある活動が、ある個人にとってレクリエーションであるか否かと言うことは、レクリエーションの表面に現われる単なる活動の問題ではなく、むしろ動機を含めた内面的すなわち情動的、あるいは態度の問題でもあるからである¹⁾。またそれ以上にレクリエーションという運動体が、激しく揺れていた日本の社会情勢のさなかに導入された経緯を持ち、その後も労働運動や教育活動の中において、集団活動の人間交流形態を有してはいるものの組織集団機能を更に発展させたい場合、あるいはその機能の弱い領域でリーダーを中心に活動を進めていく場合に集団指導の手段として必要とされたことから、表面上に現われる活動技術の獲得やその技術的指導が中心となってしまったところにも、今日におけるレクリエーションの多面的誤解や問題を生じさせている原因がある。

アメリカにおいてレクリエーションという言葉が公式に用いられた経過をみると、青少年に対しては非行化・不良化防止、事故防止、犯罪防止に役立つものとして発足・発達し市民の理解と協力を得てきたものであり²⁾、既にセラピューティックな要素が包含されていることがうかがえる。成人に対するレクリエーションも、初め、仕事からの解放であり休息であった。即ち、気晴らし、休養の意味であったが、労働と対比されたレクリエーションも社会変化に伴い、個人の占める自由裁量時間の増大により現代的レクリエーションへと変化し、活動の中に多くの意味あいと価値を持つものへとアメリカでは進んできた。

レクリエーションの正しい理解と領域の把握には、レジャーとの概念関係や、レジャー機能にみるレクリエーションの段階的領域を理解し、レクリエーションの一連の広がりや局面抽出的発想から捉え、その取り出された部分的理解によって全てを盲目的に決定づけてしまう誤りを正し、むしろレクリエーションを立体的、いわゆる俯瞰的に捉えることが必要なのである。

レクリエーションを生活全般の中で単なる遊び (Mere Play) から創造的な活動 (Creative Activity) を含む一連の段階的の広がりの中であって、余暇になされ、自由で選択され、楽しむことを主たる目的とした活動・経験の総称である³⁾と理解すれば、レジャーの中においてなされる多種多様なものであることが理解できる。このように本来、広い領域に及ぶレクリエーションの一部分だけを都合よく任意に取り出し、あたかも金太郎飴の一部分を取り出して、そこに現われた部分としての顔 (レクリエーション) が残りの全ての飴 (レクリエーション) と同じ顔であるかのように判断してしまってはならない。レジャー機能の中で、レクリエーションは、①休養・休息・くつろぎ機能；②娯楽・気晴らし機能；③発達の・創造的・感覚超越的・自己啓発的機能のあらゆる段階を複合的に有している。

レクリエーションは、その活動形態⁴⁾から分類すれば、個人活動形態、並行活動形態、集団活動形態において生起するが、形態に優劣が存在することはなく、これらの形態により人間の交流形態が変化するものと理解すべきである。集団活動では、当然、人間交流は必須要件として求められるが、並行活動では交流に制限が生じ、個人活動の中においては、交流形態は、必ずしも求められるものではない。レクリエーションが、集団活動の中でその強い位置づけを得たのは、人間交流を促進するというそれなりの理由を持っているからである。

Ⅲ レクリエーションの捉え方

過去の発生過程でレクリエーションが自律機能を持っていたかどうかや、時代的に概念の変遷がたとえどのような形態で変化してきたにしても、現在のレクリエーションが現実的に正しく捉えられなければ、セラピューティックレクリエーションの正しい理解や普及は困難である。レクリエーションの活動段階における領域の理解を敷衍するならば、消費活動型ともいえる快追求的視点の活動と、創造活動型ともいえる教育的視点の活動とが、あまりにも無価値・有価値的判断を受け過ぎているという傾向にある。これらの両極的判断は、結果論的にレクリエーションの定義を種目的に捉えることになり微視的に理解することになる。活動している内容を種目として捉え、例えばスポーツをする、キャ

ンプをする、映画を見る、家族で夕食をすること等、それらをレクリエーションとしては意識していないのである。概念的にはそれらがレクリエーションの範疇に含まれているにもかかわらず、レクリエーションとして意識化できないのである。そのような種目の一つとしてレクリエーションも同レベルの種目としての存在であると理解してしまうのである。レクリエーションを正しく、巨視的に、俯瞰的に、捉えることができるならば、レクリエーションそのものは種目的領域で理解すべきものでないのだから、それらの種目活動はレクリエーションそのものの中に息づいているという捉え方をすることができるはずである。

生きるという現象の中で、レジャーを意識し、その中で活動としての形態が生じ、楽しさやおもしろさを追及する行動を総称する意味でレクリエーションという言葉が使用されている。この楽しさやおもしろさは、単なる遊びや刹那的な楽しみばかりを意味してはいない。自己啓発・自己実現としての苦しみ・努力さえ包含している。レクリエーションは欲求から快へ向かって外に対してエネルギーを消費する“気散じ”、気晴らしの遠心発散型と、目的意識からなんらかの自己回復・自己発展を目指して内に対してパワーを蓄積する求心生産型の両極 (Span) の間に数限りない両者の比率の異なった形態が存在しているという捉え方が大切である。

レクリエーションの効果⁵⁾に対する理解も、レクリエーションサービスにより、それぞれ積極的な；①健康の維持増進に役立つ、②病気の予防に役立つ、③病気の治療に役立つ、そして④諸技能、諸機能の獲得、回復、助長に役立つという視点からすれば、無意識的な活動からも、精神解放や肉体的疲労回復作用も内在し、意識的活動になればかなり明確な確実性の高い割合で、計画性のある効果が期待されるのである。レクリエーションの理解とその捉え方が狭義になるほど、結果として、レクリエーションから得られる効果も限定あるいは制限されてしまう。逆に、広義に理解するとき、その効果も多様化してだけでなく、一連の広がりとして存在するものがレクリエーションであると理解し捉えることから、レクリエーションそのものの可能性と、潜在的価値は一層広がりを持つことができる。レクリエーションに人間性回復の存在と機会とを見いだすことができるとき、意識化され目的化され

た領域強調概念としてのセラピューティックレクリエーションはさらに治療的・療育的・療法的効果を有するものとしてその全貌を明快にすることができる。日本におけるセラピューティックレクリエーションの概念把握・運動展開、理念の普及には、まず徹底した広義としてのレクリエーション観の理解をすすめ、生活の中における単なる遊びとしてのレクリエーションのイメージを払拭すること、常に教育的建設的視点のみから捉える局面的価値支持思想の除去を進めることが重要である。

第一回世界レクリエーション会議では、スポーツとの関係においても、レクリエーションとオリンピックは車の両輪としての役割を果たすものである⁹⁾、との認識に立脚していることを忘れてはならない。スポーツの世界においても体を動かすことを中心とする身体運動 (Physical Exercise) と、技術や体力の高さを中心として結果的に勝敗や優劣が競われる運動競技 (Athletic Competition) という、これまた一連の広がりとして捉えるからこそ、車の両輪としての発想が生起するのであり、フィジカルレクリエーションとしてスポーツを捉えることができる。スポーツが本来の仕事から心を他に委ねる身体運動と運動競技であり、特質 (非日常性、競技性、規則性、フェアプレイ) の強弱により、それぞれ運動競技化・身体運動化するものであると定義すれば、レクリエーションが余暇になされ、自由で選択され、楽しみを主たる目的となされるのだから、レジャーにおいてレクリエーション (特にフィジカルレクリエーション) としてスポーツ活動が様々な形態で行われているということが理解できる。プロフェッショナルスポーツは領域強調概念化することで、全く本来の仕事をしているにもかかわらず、強い運動競技の側面を結果的に表現するものであることからスポーツの概念の中に包含しようという視点の捉え方である。レクリエーションが人間の全ての行動・活動を包含することを意味していると捉えるべきなのだが、しかし結果的な活動形態での判断だけでなく、どのような動機によりその活動・行動が行われているのかを冷静に判断する複眼を持つことも、レクリエーションを正しく捉える意味では必要なことである。まさに現代社会では、最終的にどうであったかという生産効率主義の結果論が優先されているが、レクリエーションにあってはどのように行動を起こし、ど

のような興味と意識をもってその活動が展開し始めたのかという動機論が大切にされるべきである。

レクリエーションは生活の中の、状況、条件、意識、発生形態、動機等、あらゆる要因を横糸とするならば、レクリエーションの各段階を縦糸とした組み合わせによって、一つの進化の方向ともいえる、“環境への順応”として創られた個人の固有の好みにあった柄 (Pattern) ということができる。その柄は、時には時代の流行の影響を受け、季節や、行事、活動内容、文化的要因等、多くの色や糸の太さによってファッションブルな柄 (模様)⁷⁾を見せてくれる。レクリエーションを決して金太郎飴のように全てどこを取り出しても同じ顔、所謂、部分抽出をもって、その判断により全て同じ顔をしている飴としての柄 (Pattern) だと勝手に推測や判断をして捉えてはならない。

歴史は現在にのみ通ずるものだけではなく、未来に通ずるものでもある。レクリエーションが時代と共に、変遷 (休養・回復→気晴らし・娯楽・趣味的→教育的・社会的・自己実現的価値→これら前述の複合体) してきたと同様、今後の多岐にわたる社会変化、即ち退職時期の変化、教育期間の延長、有給休暇の変化、高度な技術化による省力化、所得の増加、労働時間の短縮、国際状況の変化等によって、必然的に自由裁量時間が増加していくとともに、当然、レクリエーション自体も、社会的価値判断の変化から、変遷を余儀なくされるであろう⁸⁾。レクリエーション活動の変化がどのように生じて、レクリエーションの捉え方そのもの自体は、“人間がよりよく豊かに生きていくためにはどうしたらよいか”という視点でなければならないことは言うまでもない。変化の方向性を結果として受け止めるのではなく、むしろその変化は好ましい方向に導いていく積極的姿勢 (動機) が大切であり、レクリエーションをどう捉えるかは個人にとっても重要課題である。

IV セラピューティックレクリエーションの概念把握

セラピューティックレクリエーション (Therapeutic Recreation=アメリカでは省略するときはTRと略して表現される) の概念把握は、まず、レクリエーションそのものを前述のように、一連の段階的広がりを持

つものとして理解し、捉えなければ、セラピューティックレクリエーションの正しい方向性、その含まれる領域や分野は非常に狭義なものとして把握することになってしまう。レクリエーションそのものの正しい理解こそがセラピューティックレクリエーションの概念把握に対する出発点である。セラピューティックレクリエーションの日本語訳をどのようにしていくべきかという統一見解が、私的であれ、公的であれ、正式に出されていない現状を考えると⁹⁾、そしてRecreationの訳語も運動の進展に伴い厚生運動と言う訳語では適切でないという理解や判断によりカタカナでレクリエーションと表記するに至った歴史的経緯¹⁰⁾を振り返るとき、Therapeutic Recreationの二語の適切な訳語を無理に探索してみるよりも、療法的レクリエーション、療育的レクリエーション、治療的レクリエーション、と言うような意味に捉え、カタカナで表記した方がよいと考える。広義な意味においてセラピューティックレクリエーションは、1961年に全米医師会が発したステートメントのとおりレクリエーションの効果と、治療的效果とを共存・並列させた形態で①障害の軽減、②健康の回復・維持増進、③福祉の向上を願う人全てに対するプログラムを扱うもの、と解釈すべきである。即ち、医学的方法とレクリエーション学的方法とが好ましいバランスを保った形態を持ち、連携すべき領域分野をさすのである。そのことは治療としてのレクリエーション (Recreation Therapy) ではなく、レクリエーション的治療 (Recreational Therapy) でもないことを意味する。レクリエーションに治療的效果が強く内在するとの理解に立ち、レクリエーションをさらに治療的側面と階梯的 (段階的) に結合させ、なお、種々の楽しみや喜び、おもしろさの欲求を含んでいる局面強調概念とするものである。レクリエーション

的に独立できるように “拘束される度合いのより少ない形態” へと進展させ、作業的にレクリエーション活動を行うのではなく、自発的な動機により興味を持ったレクリエーション、所謂、“本来のレクリエーション” へと歩を進めようとするものである。セラピューティックレクリエーションの分野において、最終的な形態として求められるこの本来のレクリエーションは、セラピーからセラピューティックレクリエーションにそしてレクリエーションへと移行する連続的な、広がり、あるいは繋がり、の循環・回帰という可変的過程を経て成立している。(図1)¹¹⁾。

全米の医師会のステートメントが示すようにレクリエーションそのものに図1の機能・内容は含まれているのだが、部分強調概念を顕著にしたものがセラピューティックレクリエーションである。余暇社会化する現代社会にあって、多くの人々が、一方では心身のどこかに不調を訴え、変調をきたし、異常を感じ、半健康や不健康であることを意識し自覚している。他方、半健康、不健康でありながら意識できない結果、最終的に健康を害してしまう場合も多く見受けられるところである。健康の維持増進そして回復のために、色々な局面を包含した活動を推進して行くためにレクリエーションを積極的に活用するか、健康だといわれる人が、その健康を維持するためにレクリエーションを活用すれば、セラピューティックレクリエーションの存在が顕在化してくる。一部分の人のためのプログラムではなく、生活の豊かさを求めようとする行動や活動の中に身を委ねようとする全ての人々に関係するプログラムであることから、レクリエーションをさらに意識化させていく過程としても重要であり、セラピューティックレクリエーションの理解とその普及の視点はここに大きな意味を持っている。

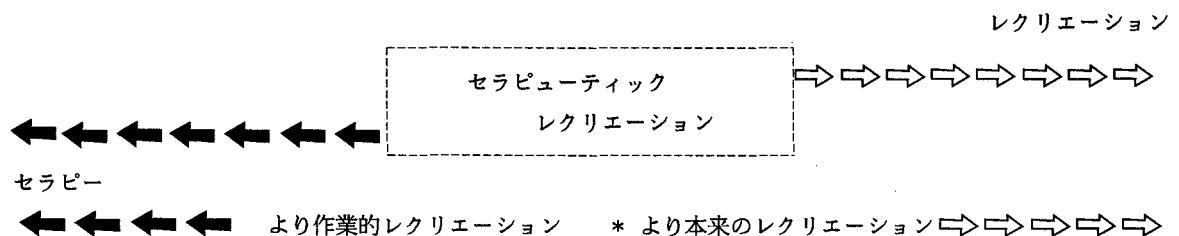


図1 セラピューティックレクリエーションは、セラピーとレクリエーションとの連続的な広がりや繋がりとしての存在を示す。

V セラピューティックレクリエーションの必要性と価値

ある物事がどれ程役に立つかという程度、なんらかの欲求を満たす程度によって認められるそのものの意義が価値であるから、セラピューティックレクリエーションの必要性は、第一に個人にとってそれが価値あるものだという認識¹²⁾によって生まれてくる。意識するとしないとにかかわらず、あるいは感覚的なものであるにせよ、価値の存在を微妙に感じとり、また、価値を見いだすことにより活動を確実に反復する行動が生起する。逆に、必要性があるからこそ、それを満たすための価値が生まれてくる。セラピューティックレクリエーションの必要性を明確化するならば、以下のようになる：①人間の基礎的欲求の充足が不可能であったり、またそれらを意識できず、ゆとりある豊かな生活を過ごすうえで、なんらかの問題を抱えている場合；②レクリエーションの価値を自ら見いだすことができなかつたり、レクリエーションの恩恵を享受できなかつたりする場合；③生活領域の拡大・充実に役立つ諸活動に対して、なんらかの制限を受ける場合；④精神的、身体的、社会的、情緒的、知的な機能の回復(Rehabilitation)、機能の獲得(Habilitation)、機能の助長(Facilitation)、そして潜在能力の開発(Potentialization)に困難をきたしている場合である。

以上のようにセラピューティックレクリエーションの必要性が整理されるとすれば、セラピューティックレクリエーションの価値は、次のように具体化できる：①(あらゆる)機会を提供できることを可能にする；②技能や自己表現を含む、運動・諸活動発表の場を提供することができる；③生活領域を個人的にも、社会的にも、充実・拡大することができる；④社会啓発(Integration, Normalization, Mainstreaming……)に役立つことなどである。

セラピューティックレクリエーションは、セラピューティックという局面が強調されているが、それは内在するレクリエーションの価値を前面に表現しようという発想であり、決してレクリエーション自体の概念が局面の強調により歪められるものではない。強調された結果として、レクリエーションの扱う領域や分野が積極的に拡大されつつ焦点化されたものである。前述

の、レクリエーションの理解や捉え方において強調している“一連の広がり段階の中であって”生活の中の効用としての諸要因(セラピー)である横軸と、レクリエーションという縦軸からなる座標の可動性や柔軟性をより広げたところに真の価値を焦点化すべきである。座標をより立体的に捉え、俯瞰すれば、セラピューティックレクリエーションとは、全ての人に治療的な可能性をもたらすレクリエーションの本質を体験することに¹³⁾価値があるといつてよい。セラピューティックレクリエーションは治療の度合いは、軽微であれ、中程度、重度であれ、人間回復へ万人がそれぞれ個人の度合いによって、外部からの影響と内発的な動機により、広がりとしての体験をさらに進展させ、深まりとしての実践を通し生活の質的向上(EQOL=Enhancing the quality of Life)をめざす“賦活財”としての価値を有している。セラピューティックレクリエーションの本質的有用性である使用価値は、治療的効果とレクリエーション的効果のバランスの変化による共存であり、交換価値が何であるかとなれば、それは即座に生活の質的向上(EQOL)に貢献する価値を有すると答えることが可能である。

VI セラピューティックレクリエーションの普及の視点

心身両面にわたる健康の維持増進に対する“賦活財”としてのレクリエーションの積極的な意識化はもとより、レクリエーションとして理解されている既成概念の修正、レクリエーションが取り扱う領域・範囲の見直しを進めながらセラピューティックレクリエーションの普及をはかるべきである。レクリエーションそのものが正しく理解され、特別な活動や経験ではなく、度合いの違いや、期間(時間)の長短、意識化の強弱、段階の異なり、これらの組み合わせによる様々な形態によって、日々の個人の生活の中になんらかの活動・経験として現われ創造されていくものがレクリエーションなのであるという共通理解をしていくことが必要である。レクリエーションの存在が一連の広がりとしてではなく、単なる遊び(Mere Play)や集団活動及び指導にその中心がおかれていたのでは、レクリエーションそのものの発展も制限されてくる。この制限がセラピューティックレクリエーションの正しい

概念把握を妨げ、範囲や領域を狭め、必要性や価値までも軽薄にしてしまう結果となる。レクリエーションはそれらの単なる遊びも価値あるものとして理解し、また強い教育的視点に立った指導も勿論レクリエーションであると理解すべきである。レクリエーションが無意識的に行われるものから、意図的・組織的になされるものまでスペクトラム (Spectrum) は多彩であると理解しなければ、局面強調概念としてのセラピューティックレクリエーションはその正しい概念から更に乖離してしまうことになる。一部においてセラピューティックレクリエーションを狭義に理解し、あたかも福祉レクリエーションと、ほとんど同義であると捉えているが、福祉の考え方は受け手としての意味合いが比較的強く、自ら創りだし自主的に構築し何かを能動的に行うという側面は、福祉になかなか含まれにくい要素を持つ。セラピューティックレクリエーションが最終的には自らが主体的に生活の質を向上させる知識、技術、能力、意識、体力等を高め生活を楽しみ豊かにすることに“ねらい”を定めているのだから、外的援助や支援無しではセラピューティックレクリエーションは不可能であると決め付けてはならない。受け手・与え手の関係はセラピューティックレクリエーションの指導形態の直接関与指導¹⁴⁾に現われる概念であり、障害や疾病、貧困等を視点とした限定された対象者に絞られるものではない。整理をするならば、レクリエーションをより目的化・焦点化し、セラピューティックレクリエーションの普及は①レクリエーションの概念修正と領域及び範囲の拡大理解；②福祉的観点からのみではなく、当然、楽しさやおもしろさの組み込まれた生活の質的向上としての日常生活的観点；③欲求の度合いから、自ら好んで選択する“カフェテリア型”プログラムと多方面に及ぶ所謂栄養提供型・補完作用型ともいえる“処方型”プログラム¹⁵⁾とのバランス；④レクリエーション的に独立した (Recreationally Independent) 本来のレクリエーションへのアドヴァイス；そして⑤集団活動指導指向から“個別援助・支援指向”を中心とした後方支援となる指導形態への転換、を視点とすることが大切である。

VII むすび

アメリカでのセラピューティックレクリエーション

運動は、資格登録制度が確立された1956年以降活発となり、当初、病院レクリエーション促進委員会やアメリカ保健体育レクリエーション学会連合 (現在のアメリカ保健・体育・レクリエーション・ダンス学会連合= American Alliance for Health, Physical Education, Recreation, and Dance=AAHPERD) が中心となっていたが、その後、資格の規準、区分、内容に関する多くの変遷をみて現在にいたっている。全米レクリエーション・公園協会 (NRP A) の下部組織である全米セラピューティックレクリエーション協会 (NTRS) の中に組織的に全米セラピューティックレクリエーション資格委員会 (NCTRC=National Council for Therapeutic Recreation Certification) が設置され、病院レクリエーションが中心であったものから、多方面にわたる専門家の登録がなされている。筆者もこのNCTRCのセラピューティックレクリエーションスペシャリスト (Therapeutic Recreation Specialist=CTRS) の資格を有するが、既にアメリカでは公式にCTRSのイニシャルを専門家の資格 (肩書き) として使用することを権威づけ、氏名の後にCTRSと表示することを認めている。アメリカでは大学院において、セラピューティックレクリエーションの専攻科、科目を有する数は、100大学を越えている。レクリエーションそのものの理解が、正しく普及されてきた経緯を持つ国との違いとも言えるが、日本においても、正しい理念の普及と共に1983年に設立された日本セラピューティックレクリエーション協会・日本セラピューティックレクリエーション研究会の活性化をすべきであろう。アメリカでセラピューティックレクリエーションの研究や研鑽を重ねた理解者も増えつつある現状であり、情報交換・意見交換と組織化を進めていくこともセラピューティックレクリエーションの理解と普及を進めていく上で不可欠な要素である。

進化とは、それ自体、矛盾をはらむ概念ではあるが、……進化の意味するところは、限定づきの必然性である。進化とは、まさしく“立ち返り、循環に対立する概念”¹⁶⁾だとすれば、レクリエーションが日本に導入された経緯に立ち返り、改めてレクリエーションの新しい循環を求めることは不可能である。現在までの日本におけるレクリエーションの進化なるものをよく理解し、新しいレクリエーションに対する環境づくりの中で、今後の“レクリエーションの進化”を産み出し

ていかなければならない。たとえ、進化が循環に対立する概念であったとしても、進化は環境に順応する概念であるのだから、日本におけるセラピューティックレクリエーションの理解と普及については環境づくりを正しく進め、順応としての進化を求めていくことである。(セラピューティックレクリエーションの研究・活動に興味・関心をお持ちの方は是非御連絡下さい。)

引用文献

- 1) 鈴木秀雄、『セラピューティックレクリエーション』p.5、講談社、1985
- 2) 三隅達郎、『レクリエーション』p.35、民主教育協会、1968
- 3) 鈴木秀雄、「大学生にとって体育とは」関東学院大学経済学部教養学会報No.12、May 14、p.4、1986
- 4) 鈴木秀雄、*A Study of Perception Leisure and the Degree of Satisfaction in Personal Leisure of Selected Faculties and Students*, p.5、フロリダ州立大学大学院博士論文、1977 (オレゴン州立大学での出版は1978年)
- 5) Paul Hann, *Recreation: A Medical View Point*, Translated by Imai (Tokyo Bikosha, 1976) pp.123-124
- 6) 三隅達郎・白山源三郎、インタビュー、(関東学院大学におけるレクリエーション研究会1980年1月13日)
- 7) 鈴木秀雄、「生涯スポーツの意味」『桜門体育学研究』第25集、p.29、1991
- 8) 鈴木秀雄、『セラピューティックレクリエーション』p.15、講談社、1985
- 9)10) 鈴木秀雄、前掲書、p.59
- 11) 鈴木秀雄、前掲書、p.62
- 12) 鈴木秀雄、「セラピューティックレクリエーション」『平成5年度上級身体障害者スポーツ指導員養成研修会研修資料』全国身体障害者福祉センター、p.10、1994
- 13) Gerald S. O'Morrow, *Therapeutic Recreation*, 1976, Translated by Imai (Tokyo, Fumaido, 1981) p.101
- 14) 鈴木秀雄、『セラピューティックレクリエーション』p.132、講談社、1985
- 15) 鈴木秀雄、前掲書、p.117
- 16) J.ホイジンガ、『朝の影の中に』堀越孝一訳、p.36、中央公論社、1979